

国内経済情勢

概 観

最終需要の根強い拡大を背景に出荷は相当な増勢を続けており、このところ伸び悩みぎみとなっていた生産も4月には大幅な増加を示した。製品在庫率は大勢横ばいぎみに推移しており、製品需給に関し供給超過と判断する企業の割合も減少している。主力商品の市況をみると、相場の上伸に伴う流通段階での模様ながめ気運の台頭から落着き商状を呈しているが、需給の基調には変化はなく、荷動きは引き続き活発である。卸売物価はひとところほどの騰勢はみられなくなっているが、依然強含み基調を続けている。

財政資金の大幅散超に加うるに金融機関貸出が相当な増勢をたどっていることもあって、企業金融はひとところ予想されたほどの引き締まりを生ずることなく推移している。しかし大企業では長期資金の調達に期待ほどには進捗しないため、先行きに備えて総じて慎重な資金繰り態度をくずしていない。

4月の国際収支は、総合収支で144百万ドルの大幅黒字となったが、為替銀行の外銀借入れ等の返済により外貨準備高は1年ぶりに減少を示した。季節調整後の貿易収支は輸入の落着きから黒字幅をさらに拡大した。このように国際収支は大幅黒字基調を続けているが、最近の国際通貨不安や世界の高金利が、海外環境の先行きにいかなる影響を与えるかについては慎重に見守る必要がある。

生産は著増

鉱工業生産(季節調整済み)は、3月に前月比

-1.5%と減少したあと、4月(速報)は+4.9%の記録的な著増となった。1～3月に前期比+0.7%と増勢鈍化を示した生産が当月様変わり急増したのは、1～3月にたまたま低調であった大型の一般機械類の生産が増加したこと、繊維ならびに家電製品についてこれまで尾をひいていた暖冬の影響が払拭されたこと、昨年末来メーカーの生産態度がやや抑制ぎみとなっていたトラックおよび乗用車が、製品在庫の調整一巡や新車売出しなどを背景にかなりの増加を示したことなどが響いている。

4月の生産を財別にみると、前月大幅に減少した一般資本財(化学機械、圧延機等)、耐久消費財(家電製品、乗用車等)が著増したほか、建設資材(金属製建具等)、生産財(鉄鋼、化学等)、非耐久消費財も軒並み増加した。

一方鉱工業出荷(季節調整済み)は、3月に前月比+2.5%と相当な増加のあと、4月(速報)も+2.1%と続伸し、根強い増勢を示した。出荷の動きを財別にみると、建設資材(金属製建具等)および前月著減した耐久消費財(家電製品等)が大幅に増加したほか、生産財(化学、鉄鋼等)、一般資本財(化学機械等)もかなり増加したが、反面前月著増の船舶は反動減となった。

製品在庫は3月に前月比+0.5%の微増のあと、4月(速報)は耐久消費財(クーラー等)の著増を中心に+2.5%の増加を示した。このような製品在庫、出荷の動きを映じて製品在庫率指数(93.9)は前月(93.6)をわずかに上回ったが、大観すれば昨年末以降横ばい模様となっている。ちなみに、5月時点調査の本行「主要企業短期経済観測」ならびに「中小企業短期経済観測」の結果をみる

と、製品需給に関して供給超過と判断する企業の割合はわずかながら減少しており、当面の業況判断についても悪化を見込む企業の割合は漸減傾向を示している。

設備投資の動向を上記短期経済観測の結果からみると、大企業の設備投資(工事ベース、季節調整済み)は1～3月に前期比-0.9%の微減となったあと、4～6月は+16.2%の大幅増加が見込まれており、中小企業では1～3月に前期比+15%と増加したあと、4～6月も同じく+15%と大幅増加が続くものと予測されている。また同時に調査された44年度の大企業の設備投資計画(工事ベース)は、前年度比+18.5%とかなりの伸びを示しており、前回調査時(2月)の年度間計画(+12.0%)を大きく上回っている。

なお、このほど集計された企業の本年3月期決算状況を見ると、増収増益率は前9月期を上回り、この結果41年3月期以来7期連続の増益決算となった。

また労働力需給は依然引き締まり状態を続けており、本年の春季賃金交渉の妥結結果をみると、ベース・アップ率は前年実績を大きく上回っている。この間、4月の全国百貨店売上高(季節調整済み)は、衣料品の売れ行き好転から前月比相当の増加を示したが、5月にはいつてからも東京百貨店売上高はかなりの伸びを示しており、個人消費は引き続き根強い増勢をたどっているものとみられる。

主力商品は落着き商状ながら荷動きは活発

最近の商品市況をみると、前月急騰した鉄鋼は、条鋼類が続騰した反面、鋼板類が保含いないし小反落となり、また綿糸、銅も小幅の軟化を示すなど主力商品は総じて落ち着いた値動きを示した。その他の商品では、化学品の一部が強含みを続け、石油、紙等も下げ止まりないし小反騰を示すなど、底堅い動きがみられる。

主力商品が落着き模様となったのは、前月動意を示した流通段階において相場の上伸に伴い模様がなめ気運の台頭ないし利食い売りがみられた(綿糸、鉄鋼)ほか、海外相場の下落(銅)があったことなどによるもので、需給の基調にはさしたる変化はうかがわれず、荷動きは引き続き活発である。

本行卸売物価は、4月に鉄鋼、非鉄の大幅上昇により前月比+0.3%と3ヵ月連続の上昇を示し、5月上旬も、鉄鋼、繊維等の上昇により前旬比+0.1%と続騰したが、中旬には上記のような商品市況の動きを映じ保含いとなった。

一方消費者物価(東京)は、4月に前月比+1.3%と再び騰勢を強めたあと、5月は-0.3%と低下したが、季節商品を除くと+0.3%と上昇を続けている。

大企業は慎重な資金繰り態度をくずさず

4月の銀行券は、307億円の発行超(前年同416億円)となったが、一方財政資金が月中4,296億円の大払超(前年同1,894億円)となったため、金融市場では多額の資金余剰を生じ、本行は短資業者に対する政府短期証券の売却などによりこれに対処した。

5月にはいつて中旬までは、財政資金が外為会計の受超持続をはじめ租税の受入れ進捗などにより引揚げ超過となったにもかかわらず、銀行券が順調な還流を示したため市場ではかなりの資金余剰を生じ、本行は短資業者に対する政府短期証券の売却などにより調整したが、中旬末以降は銀行券が増発に向かったため市場は資金不足に転じ、本行は上記短期証券の一部買いもどしを実施した。この間コール市場では、5月1日以降翌日物、無条件物について日歩1厘の低下をみた。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は、4月には+16.4%と前月よりやや低下したが、5月にはいつてからは再び水準を高めており、銀行券は根強い増勢基調を続けている。

4月の全国銀行貸出は、前年同月(865億円減)とは様変わり、月中56億円の増加を示した。これは、例年かなりの減少を示す都市銀行の貸出(前年同月726億円減)が月中84億円の小幅の減少にとどまったほか、長期信用銀行の貸出もかなりの増加を示したためであり、3～4月を通計すると、全国銀行貸出は都市銀行を中心に大幅の増加となっている。

企業金融は一般にひとところ予想されたほどの引き締まりを生ずることなく推移しているが、これには財政資金の大幅散超に加うるに、こうした全国銀行貸出の大幅の増加も響いている。しかし大企業では、長期資金の調達が必ずしも企業の期待ほどには進捗しないため先行き資金需要のいっそうの増大が予想されることもあって、総じて慎重な資金繰り態度をくずすには至っていない。前記「主要企業短期経済観測」によれば、企業の手元流動性は前回調査時(2月)に予測されたような低下を示すことなく横ばいで推移しており、企業間信用にもほとんど変化はみられないが、先行きの資金繰りについては、依然警戒的な態度がうかがわれる。

なお全国銀行の貸出約定平均金利は、3月1糸低下のあと、4月は1糸の反騰を示した。

この間公社債市況は、新発債の発行が低めに押えられているほか、売手側も慎重な売却態度をとっていることなどから、5月にはいりやや落着き模様となっている。

国際収支は大幅黒字基調持続

4月の国際収支をみると、貿易収支は季節的事情などから前月より黒字幅を縮小したものなお相当の受超となり、また貿易外収支や長期資本収支の赤字幅も縮小したため、総合収支は引き続き144百万ドルの大幅黒字を示した。この間金融勘定では、海外金利高を映じた外銀借入れなどの返済(円シフト)を主因に為替銀行の対外ポジショ

ンが263百万ドルの大幅改善を示したため、外貨準備は約1年ぶりの減少(月中110百万ドル減)となった。なお季節調整後の貿易収支は、輸入の落着きを主因に既往最高の前月(357百万ドル)をさらに上回る388百万ドルの黒字を示した。

4月の輸出は、前年同月比で+26.1%、季節調整後の前月比では-2.1%とやや伸び悩んだが、これは前月著増した船舶輸出の反動減によるところが大きい。品目別(通関ベース)にみると、食料品が韓国に対する米の貸与を中心に著増したほか、テレビ、ラジオ、合繊織物等も高い伸びを示したが、他方前記のように船舶が急減し、鉄鋼、化学製品等もやや伸び悩んだ。地域別には、米国向けの伸び率が鉄鋼の不振を主因に低下ぎみであるが、反面東南ア向けは好調な足どりをたどっている。先行指標である輸出信用状接受額(季節調整済み)は、3月に前月比-9.9%と大幅減のあと、4月は+6.7%とかなりの回復を示したが、5月にはいつてからはほぼ横ばい程度で推移するなど、月々のフレをならしてみるとこのところ高水準ながら増勢はかなり鈍化している。

一方4月の輸入は、前年同月比+5.8%の低水準にとどまり、季節調整後の前月比では-6.3%とかなりの減少となった。もっともこのような輸入の落着きには、米国の港湾ストが引き続き影響した模様である。品目別(通関ベース)にみると非鉄金属がかなりの増勢を示したほかは、とうもろこし、綿花、大豆等が引き続き前年水準を下回り、鉄鉱石、石炭等も落ち着いた動きを示した。もっとも、先行指標である輸入承認額(季節調整済み)は、3月に前月比+7.9%の増加のあと、4月は+24.7%の大幅増加となった。4月の急増には大口の長期契約分が集中したことも響いているが、かかる一時的要因を除いてみても輸入の先行きには漸増気配がうかがわれる。

(昭和44年5月30日)